

二〇一一年四月二七日(多田銀山参加者一四名)

あたたかや一つ祠に神ほとけ	菜々
山神へ磴は胸突き春落葉	"
水草生ふ廃坑跡の門川に	"
囀や村人総出宮掃除	"
鶯や山は萌黄に多田の里	"
杉美林ぬひつつ間歩へ春惜しむ	わかば
うす暗き雑木の山に花あえか	"
古時計刻一つ打ち春山家	"
葉桜の下旗竿の花浄土	"
掘痕の荒きをなぞり春惜しむ	宏虎
置物に栄華を想ふ春山家	"
春陰に鎮もる村の古祠	"
前山のつつじ明りに磨崖仏	うつぎ
山蟻のはやせはしげに間歩の口	"
春陰に吾が声響く間歩の口	"
雑木山白の斑は残る花	百合
初蝶を間歩入口に見失ふ	"
里山路みどりの風の奔放に	"
坑道を出て目つぶしの新樹光	よし子

若葉色映してをりぬ神の水	"
鉾毒の川といへども澄めりけり	"
春山路草の名教へ教へられ	きづな
間歩の径白山旗竿花盛り	"
くぐりたる間歩の一步に汗の引く	"
奥見えぬ間歩の入口落椿	有香
磐石に彫られて涼し観世音	"
廃坑へたどる岨道落椿	ぼん子
蹲に苔の花咲く山祠	"
土堤埋む白山旗竿風薫る	かれん
間歩口に青葉しぐれの宿りかな	"
山笑ふ坑道あまた懐に	はく子
村祠つつじ彩る山間に	"
すっぱりと抜ける青空初蝶来	小袖
廃坑の入口ひそと一人静	満天
目まとひを払ひはらひて間歩に入る	"
天気予報はずれて笑ふ里の山	"

吟行句会みの選

二〇一一年四月二七日(多田銀山参加者一四名)